寺子屋と塾

俳句の流行

俳聖松尾芭蕉は、天和二年十二月江戸深川の芭蕉庵を焼け出されて、俳友である秋元の家臣高山伝右衛門を尋ねて来谷、翌天和三年二月の頃田原瀑布の景観を詠んだものに

勢ひあり　氷柱きへては　滝津魚

という句がある。

当時谷村は俳諧が旺んで、芭蕉の来谷を記念して、この地方の俳人三十六人が集って、前の句を巻頭にかかげた句集運水編『ひもかがみ』を刊行した。そして前掲の句を石にきざんだ碑を田原瀑布の右岸滝見亭の前、家中川のあたりに建てたが、大正の初め紛失してしまった。このため昭和二十六年九月近村の有志によって再建したのが現在のものである。

芭蕉の来谷によって、俳句熱は一般庶民に浸透し、城下町谷村を中心として、附近の村々に盛んになった。そしてこの頃から、村々の神社仏閣に地方の粋人による、俳句集を篇額にして奉納することが流行して、いまもその名残りを見ることが出来る。

境

大神さん　に　一面
天神さん　に　二面
夏符
耕雲院　一面
長慶寺　二面
八面神社　一面
十二天社　一面

幕末の俳人『峡中俳人伝』による。

小林椿翁　中津森の人　本名　小林茂兵衛

江戸の名人大家と交り、郡内を代表する俳士なりと唱えられた。〔文久三年（一、八六三）十一月十六日歿〕

動かぬは　却て暑し　門の竹
不意に出て　仲間入りする　涼み哉

小林椿年　椿翁の長子　襲名して茂兵衛という。椿翁についで江戸に多くの俳友をもち、資性淡白であったので、交遊した風客の同情を受けることが多かった。〔明治二十三年（一、八九〇）七月十七日歿　行年七十四歳〕

当分は　よき日ばかりや　初暦
春雨や　鶴も田につく　ところ〳〵

大森香芸　境広徳院住職〔明治十五年（一、八八二）行年六十一歳〕江戸の一具庵一具に随って雅道に遊び法務の傍ら俳句を弄んで楽しみとした。

不尽の雲　外山になたれかかりけり
眼のくもり　離れて白き　牡丹哉

天野不争　境天野伴造（先代）〔明治十九年（一、八八六）四月十日歿〕音に聞えた資産家だったので、江戸をはじめ各地の俳人の来訪者多く、その数三千名に及んだという。

朝露の　薄う消えけり　蓮の花

を辞世の句として四十七歳でこの世を去った。

黄鳥や　聞けても見たき　窓の前

はるるほど　不二の低きや　消ゆる雪

杉本杉夕　朝日の人（安平という）林嘉庵一樹菊守園見外について俳諧を学びその薀奥を極めた。奇人の俳人として親まれた。

黄鳥や　鳴かぬ時さへ　愛らしき
ねる顔に　勿体なさや　窓の月

勝俣三千代　下夏狩の人で義七という（別号を春草庵という。）勝俣は美声で義太夫の名手であった。この山間に稀に見る粋人とされた。明治二十七年（一、八九四）一月十一日六十歳で逝去した。

梅か香に　鳥影のさす　障子哉
町なかに　露の宿あり　植木店

以上の人達は地方の俳人として『峡中俳人伝』にあげられている。椿翁以外は明治になって死亡しているが、その青年時代は幕末の人である。俳人としての修練は別として、基礎的修養は寺子屋なり塾なりでしたものにちがいない。